



# 今月の大槌びと

若生 剛さん  
(46歳・大槌商工会)

大槌商工会の職員として、平成9年から勤める若生さん。事業者の皆さんの前向きな姿勢、やってみたい取り組みに、同じ方向を向いて「伴走」しながらサポートをしたいと話します。

再建を考える事業者の姿に自分も希望が見えた

異動により3年間大槌を離れていて、ちょうど東日本大震災のあった年の4月に大槌商工会に戻られたと伺いました。

若生さん(以下若)―正直、戻ってきて最初は、震災後の様々な手続きを終えたら、商工会は無くなるかもしれない、とさえ思いました。会員の約9割が被災し、亡くなった事業者さんも大勢いました。私たちも必死で避難所を回り、現状把握を行っていました。

震災から今までで節目と感ずるのはいつですか?

若―1か月後ぐらいに、仮設事務所を構えたころから、会員の事業再建に向けて本格的に動いていきました。仮設

商店街の説明会に100人以上が集まった時、「希望が見えた」と感じたのを覚えています。

若―私たちの仕事は、事業者さんの前向きな気持ちや取り組みに、同じ方向を向いて伴走者のようにサポートすることだと思えます。引く張つていくとか指導するということも

今まではないし、実際震災から今まで、逆に事業者さんの姿勢に引く張られてやっています。た部分もあると思っています。

復活した産業まつりは町を知る「大槌博覧会」

産業まつりが8年ぶりに復活しましたね。

若―産業まつりは、震災前20年以上も行われていて、復活には私自身強い思いがあり



東京で物産販売をする若生さん



10月号 佐藤 ひろ美さん  
11月号 若 生 剛さん

前号と今号の大槌びとが対談するコーナーです。様々な分野で活躍する大槌びとの皆さんが、誌面の上で出会います。「たし算」ではなく、「かけ算」の絆が、また新たな大槌を創っていきます。

若生さん(以下若)―実は佐藤さんは同じ高校の二つ上の先輩で。ギター同好会でバンドをやっている姿を文化祭で見ていたのを覚えています。

佐藤さん(以下佐)―そうなんです！その頃はバンドの事しかやっていなかった時です。それから20年以上も同じ事しかやっていませんけど(笑)

若―勤め始めた頃、大槌の商工会にも、インディーズのCDを持っていらしたことがあって。

佐―私はよく覚えていないんですが、あのCDがきっかけでゲーム会社の方に声をかけていただいたので、今思えば転職となったCDですね。そんな頃お会いしていたんですね。

若―実は今回の三陸♥おおつちPR大使の検討にも関わったので、ぜひ佐藤さんには大槌のPRを手伝って欲しいです。

佐―私たちが外から出来ることと、若生さんたちが町の中をつないで出来ることがうまく合わさって、大槌の食や産業、自然がPRできればいいですね。

若―コネクトフェスティバルも見に行きましたが、あんなに人が集まるのはすごいと思います。

佐―私たちが1回目は半信半疑だったんですが、今は人を呼べる自信があるので、ぜひ地元事業者さんにも出店してほしいです。

若―そついった外からの思いにに応えられるように、少しずつでも声掛けをしていくが必要かなと思います。

佐―お互いのフィールドで、これからも頑張っていきましょう！

